

Introduction to the scrolls in the collection of Koufukuji Temple part 2

YOSHINAGA Takanori

This article is the second in a series of introductions to the materials in the Kofukuji collection.

As mentioned in the previous article, Kofukuji Temple is the central temple of Rokusai Nembutsu in Kyoto. This time, we will examine important materials that were not introduced in the previous article. These materials have been the focus of much attention in the study of Rokusai Nembutsu. In this study, we have made some new discoveries by reexamining these important materials. As a first step toward publicizing the results, we have decided to make the full texts of the materials available to the public.

It is very significant for academic research that the materials presented here are now widely available to the public. And regional research using these results continues to this day.

光福寺所蔵卷子本の紹介 二

吉 永 隆 記 YOSHINAGA Takanori

解説

本稿では、前稿に続いて千葉山斎教院光福寺（京都市左京区田中上柳町、以下、光福寺）所蔵の卷子本四点を調査・講読した成果について紹介する¹。

既に前稿で確認した通り、光福寺は六斎念仏の総本寺に位置付けられている浄土宗寺院である。光福寺所蔵の卷子本については、六斎念仏の由緒を伝えるものとして注目されてきたものの、主として佛教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究』（隆文館、一九六六年、以下、『民間』）にて翻刻されている『浄土常修六斎念仏興起』（以下、『常修興起』）のみが活用されてきた経緯がある²。こうした研究史上の問題を指摘した山中崇裕氏は、光福寺所蔵の卷子本四点の比較検討を行い、それぞれの成立時期や関係性を明らかにしている³。その成果を踏まえ、改めて卷子本四点の基本情報を整理しておく。

A、『浄土常修六斎念仏興起』（『常修興起』）

補足・刊本あり（『民間』ほか）、原テキストは一四世紀後半までに成立か。

B、『浄土常行六斎念仏興起』（『常行興起』）

補足・刊本あり（二〇二二年山中論文）、原テキストは近世初期成立か。

C、『書功』

補足・刊本あり（『民間』ほか）。

D、『齋教院光福浄寺筆録』（『筆録』）

補足・一部刊本あり（二〇二一年山中論文にて「諸縁起」・「當寺血脈」部分が翻刻）。

以上の卷子本四点のうち、近年まで翻刻すらなかったD『筆録』と、C『書功』については、前稿においてその全文を紹介した。前稿に続く本稿では、六斎念仏の世界観やその由緒を伝えるA『常修興起』とB『常行興起』について紹介することとしたい。先に述べた通り、A『常修興起』については、早くから『民間』にて翻刻されているものの、原本と照らしてみると誤植も多くみられた。また、二〇二一年に山中氏が初めて翻刻して全文掲載したB『常行興起』についても、誤植とみられる箇所が確認できた。

そこで本稿では、可能な限り原本通りの表記に留意しつつ、これまでに翻刻されてきたテキストとの異同についても分かるように紹介することとした。なお、前稿および本稿で紹介する卷子本四点を通覧してみると、六斎念仏の由緒に限らず、中世から近世にかけての光福寺の変遷に関わる情報が少なくない。とりわけ光福寺が現在地に移転してくる戦国末～近世初期については、地域史や政治史に関わる情報もあり、注目される。近世成立の由緒として内容の信憑性が低いと評価されてきたこれら卷子本については、山中氏の指摘する通り史料価値の再評価が必要であろう⁴。本稿では紙幅の都合で紹介できなかったが、内容検討の成果は別稿を用意することとしたい。

註

1 前稿は、吉永隆記「光福寺所蔵卷子本の紹介 一」（『京都精華大学紀要』第五六号、二〇一三年）。

2 『浄土常修六斎念仏興起』の検討および研究史等については、山中崇裕「浄土常修六斎念仏興起」にみる近世初期の六斎念仏の宗教性」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四三号、二〇一五年）を参照。

3 山中崇裕「光福寺蔵正慶写本にみる六齋念仏の寺院掌握と変容」(『宗教民俗研究』第三一号、二〇二一年)。卷子本四点の略称についても、前稿と同様に本論文の整理に従っている。

4 前掲註3の山中論文。

○凡例

- ・原則として、異体字・ルビ・改行・補注・闕字・平出等は、可能な限り原本表記のままとしている。そのため、不自然な表記があつても、そのまま掲載した。
- ・A『常修興起』については、『民間』の翻刻文と異なるもの等に註を付すようにした。
- ・B『常行興起』については、二〇二一年山中崇裕論文に付された翻刻文と異なるもの等に注を付すようにした。

○『浄土常修六齋念仏興起』(卷子本)

(題簽)「浄土常修六齋念佛興起 法如大師御筆」

浄土常修六齋念佛興起

夫大覺世尊初筵を寂場に開き散筵を鶴林に示し給ふ中間五十年來五乘を誘引し群機を沙汰し説經區に分るといへとも彌陀超世之悲願にしくはなしひとゑに三有流轉の衆生をして三途八難之苦患を出離せしめあまねく九品の淨利に至らしむるかゆへに諸經に讚する處多彌陀に有り末世の頑嚚称名の功にあらざるより菩提の種子何に依て芽を生し正覺の真華何をもつてか聞く事をゑん、

當濫觴は慧心僧都堂宇創建して母安養尼の守本尊千手千眼觀音薩埵を安置す寺領無司數世をへる寛元年中に博多承天寺圓爾京に入て領す予弟子と成て剃髮取名し随從宗学なすに師曰汝か器量にてハ予ことく遍參

修学すへき思なし此の靈地ハ恵心開場す慧心はよく阿弥陀佛の像を彫刻し名號を欄多佛意にかなふて本佛必來す母安養尼ハ薩埵を念して金蓮に救れ母子ともに西方淨利に生す黒谷源空ハ天台山の學者とゆへとも善導の八軸疏散善義の文一心專念弥陀名号行住座臥不問時節久近念々不捨者は名正定之業順彼願故云文に依て釋迦彌陀二尊の意を解し年來修し行する聖道門

を捨て心存助給口称阿弥陀と他力念仏淨土一門を弘めて生死流轉の衆生を九品淨土に至らしむるなり予も園城寺に入て天台宗学とゆへとも遍參普門寺に學汝も源空のことく安心決定し鐘鼓響し念仏を称え薩埵を守遍念佛の一門に通へし當靈地を附屬す任せよと歸退師命のことく居て薩埵を恭敬時々普門品讀誦口称念佛竊に勤修ること年を重たり文永元年仲稔季秋七日子之下剋に

堂内俄に赫奕異香奇意の思をなすに威儀歴々たる四人現前に端坐し給ふ不思議と頭さけしに高聲にて演給ふハ汝薩埵につかへて一食齋戒をたもち水食たつて飢渴のものに齋會を施し西方阿弥陀を欄へる慈悲忍辱の志を

天帝釋 感應有 汝に告る閻浮提日本國貴賤男女止惡修善の者には 天帝釋 四王に勅しておの一方を治せしめ白月八日には使者を遣し十四日には太子を遣ひ十五日にハ王自くたり黒月三日も又々かくのことくして衆生の善惡を觀す王若くたる時は皇宿鬼神ともに随徒諸天歡喜して福をあたへ罪を滅せしむ汝鐘鼓を響し念仏欄る

鐘鼓功德は取勝王經に金光明鼓出妙音聲普至三千大千世界能滅三途極難 六齋精進功德經に奉鐘妙香音聲奉鼓得好音聲受天樂とあり鐘の音聲ハあまねく三千大千世界に至三途の極難を滅して好音声多て天樂をうく鼓の音聲ハ好香音聲多て三界の苦を脱し即菩提證なり何況や四十八願の主阿弥陀果號を高く調聲せは功德廣大無量

にして上有頂徹し須彌の四洲に響巡り下奈梨獄中通し
 罪人の苦を済貽飛蟻動の類に至る迄ひとしく法味を受
 用せしめ人界衆生ハ諸願満て四柱煩惱一切の罪を滅し拔
 苦浄土に生ず現に天下五穀豊饒民安穩延年轉壽王城守護
 は上有頂を祈念し奈梨獄中を濟度せよ六斎日に妙音音声
 鐘鼓念佛調へる者ハ魔障^神導なさす 帝釋天 四王 諸天主
 天神地祇、万神部類眷属諸佛菩薩冥途主炎魔王冥官
 冥衆に至迄守護すへし帝釈勅のごとく疑心なく授速悟て
 勤修怠ことなく衆生を教化せよと告給ふ耳根心肝徹し歡喜
 涙にむせふに予頂を摩給ふと忽赫奕消て姿見へ給はす
 薩埵の燈火も幽なり夜も日出に至明天情案するに学道
 徳なきに 帝釋天 感應 告給ふこと止ことなし
 とゆへとも軽々しく鐘鼓も調かたく念佛に四十八種の節目
 を選分て諸經要文和讃唄し鐘鼓に妙香好声音調
 することを術熟勤修の功德考念佛鐘鼓にそれ〳〵に名を
 附て文永貳稔青陽元三に開宗すより六齊日時々勤修
 然る處 帝釈天勅かふむりしことを時帝
 龜山院 叡聞に達し同歳仲秋廿四辰⁷予を
 禁裏^江召⁸ 帝釋天告ことくして勤修すへしと帝命
 うけて鐘鼓を響し和讃唄調声して王城守護の祈
 禁庭にて勤修す 叡感有て六齊念佛と 勅號を
 賜 皇家鎮護 率土民庶快樂五穀豊饒を祈へしと⁹
 勅奉てより大裏洛中村山野民家を廻勤す常に思は
 衆生散動にして識猿猴よりはけしく心六塵にへんし¹⁰
 てやむによしなし煩惱の悪朋には親しみやすく菩提善
 友には近つき難し種々境界目にふれて貧を起す是以
 て久しく生死の流に順し出離の縁有ことなししかのみ
 ならず商士の街巷に在る者庶民の田園をたかへすものは
 終日諍々として衆務をいとなみ通宵喧々として衆悪を積
 其惑障豈えてはかるへけんやかかくのごとくの凡夫安心亂應

にして三昧を得へきによしなし唯佛願に託して脱苦を
 求めんにはしかし今貴賤をゑらはす利鈍を論せず往
 生浄楽の種子を植しめんか為に六齊念佛佛を老若男女
 僧俗に勸衆民の市廓に歌ひ山野に鉦鼓を響かし
 和讃唄し念佛高調聲打者をして發心の仲たちと
 ゑせしむるに念佛節目四十八種の中に四遍白毫米と名る念
 佛鐘に調拘留銘と名る太鼓調佛法僧を三つかねに打發願經
 を前讚に唄し彌陀願驅廻向^畢鐘鼓念佛音聲調
 得ることを手に打て口傳へり此功德廣大無量也 當國の
 遐迩の輩につたへし成功にあらず諸国所々に廻行し
 四十八種之念佛鐘鼓に合て調声を募傳へてひと〳〵口脾に
 六斎念佛と、め都鄙に修する輩を化導すよつて此化に
 應するともからは公卿大臣より士農工商に至まで其教繁時
 帝 花園院御宇 官庫に納有彌陀像正和貳^癸丑年
 孟冬十三日寅剋の比俄に嚇奕と光を放朝廷 叡感有て
 同月十五辰に予 禁裏^江召¹¹して弥陀像を下し
 給ふ尊容を拜すれば閉目佛驅日想觀の像と
 奉奏は 叡慮 不斜今より已後時をゑらはす日を
 隔す常修六齊念佛に行へしと勅詔奉し隨喜の
 涙心肝徹し難有佛像を侍僧に負せて退則本尊に
 奉成日々勤行策勵怠る事なし余齡を悟り弟子等に
 爾來六齊念佛術熟を傳れともいまた奥旨を傳す固茲
 傳授書を附屬して委に空察に授与せしめ烏菟循環す
 とゆへとも法猶一器寫瓶なり伏以六道周居にして重昏永夜
 なり生盲無目にして恵照いまた期せずひとへに称名に
 あらずんは誰か能救はん六齊念佛の安心尤時機に
 應せり百世万代是を勤て名濫宗脉聯綿として
 癯する事なかれ若然は後は清浄の域に生し現には
 無比の樂を受天下和順日月清明風雨時を以てし
 障^災障侵さす國豊に民安して兵戈¹²用る事なく徳を崇

仁を興し務て禮讓を行ふ永く佛法の金湯となり久しく皇家の藩幹とならんと云ふ事然り仍而興起かくのこし

皇家鎮護東善寺

正和三甲^甲天季夏廿一日 六齋念佛開宗法如判

弟子授與

空察^江

右一卷者 皇家鎮護東善寺

六齋念佛開宗法如弟子空察^江

授與之興起師子傳來有披見處

六齋念佛號 詔奉光福寺依為歴然

叡覽 達處 叡感有 因茲

此一軸遂書功贈畢

小野牛皮曼荼羅寺

天和二^壬戊^戌載二月七日 隨心院門跡大僧正俊海(花押)

〔三十三歳〕^(異筆)

六齋念佛惣本寺

光福寺正慶^江

(異筆)

「右一卷者隨心院俊海前大僧正之

真跡也余覽畢筆此者也

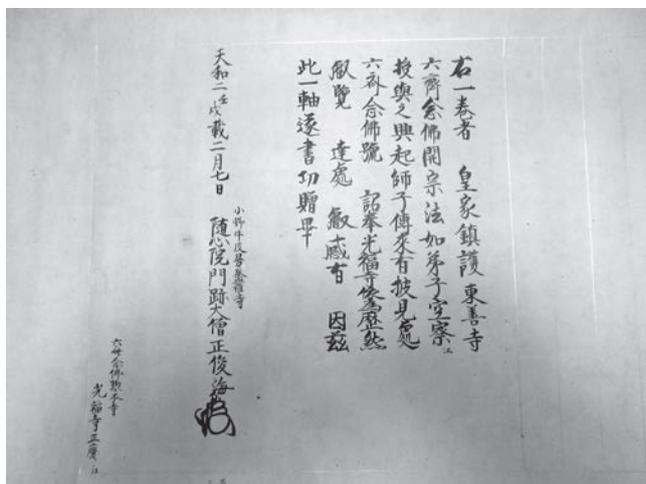
寶曆五乙亥年臘念七日

右大臣(花押)

註

1 依して(「民間」)。

- 2 八軸疏散に西方善義の文(「民間」)。
- 3 下問(「民間」)。
- 4 「汝」なし(「民間」)。
- 5 豊饒万民(「民間」)。
- 6 擬生(「民間」)。
- 7 二十四(「民間」)。
- 8 「民間」では、闕字でなく、平出として改行している。
- 9 「と」なし(「民間」)。
- 10 へして(「民間」)。
- 11 城(「民間」)。
- 12 才(「民間」)。
- 13 護(「民間」)。
- 14 「臘」なし(「民間」)。



『常修興起』末尾、隨心院門跡俊海署判部分(筆者撮影)

○『浄土常行六齋念佛興起』(卷子本)

(題簽)「浄土念仏興起書」

浄土常行六齋念佛興起

夫大覺世尊初筵を寂場に開き散筵を鶴林に示し給ふ中間五十年來五

乗を誘引し群機を洩汰し説経區々

に分るといへとも弥陀超世之悲願にしては¹

なしひとゑに三有流転之衆生をして

三途八難之苦患を出離せしめあまねく

九品の淨利に至らしむるか故に諸経に讚

する處多弥陀に在り末世の頑聾称名の

功にあらざるよりハ菩提の種子何に依て芽

を生し正覺の志花何を以てか開く事

をゑん故に今貴賤をゑらハす利鈍を論せず

往生淨樂の種子を植しめんか為に六齋念仏

興行³する事誠に其ゆゑ在哉

奥當流は道空法如上人に濫觴⁴す然に空師

は西山善惠上人の孫弟⁵勸智上人の門葉俗

姓は奥州伊達之一族也洛陽春日通常行⁷

院に寓居す省にをもへらく衆生散動にして

識猿猴よりはけしく心六塵にへんしてしはらくも

やむによしなし煩惱の悪朋には親しミやすく

菩提の善友には近つき難し種々境界目

にふれて貪を起す是以て久しく生死の流に

順し出離の縁ある事なししかのミならず商士⁸

街巷に在縁もの庶民の田園をたかゑすものハ

終日淨々¹⁰として衆務をいとミ遍宵喧々¹¹と

して衆惡を積むは或障豈得てはかるへ

けんやかくのことくの凡夫安心乱想にして

三昧を得へきによしなし¹²唯佛願に託して

脱苦を求めんにはしかし思もふにそれ六齋日

は止惡修善の時なりゆゑいかんとなれば斯日

天の帝釋四王に勅くしてをの¹⁴一方を治せ

しめ白月の八日には使者を遣し十四日

には太子を遣し十五日には王自くたり

給ふ黒月三日も又々かくのことくして

衆生の善惡を觀し給ふ王若ミつから下り¹⁶

給ふ時は星宿鬼神共に随從す若止惡修善

のものあれば諸天歡喜して福をあたゑ

罪を滅す何況や万徳所歸の果号を唱る¹⁷

ときは其徳無量にして算數の能知る處

にあらすこれ錦上に花をしき雪上に霜

を加るものなりと言へし¹⁸是故に毎月六

齋日に當て鐘鼓をならし和讃を唄し

高声念佛して世俗をすゝめ衆民の市廛に

歌ひ山野に抔者をして發心のなかたちを

得せしめ給ふ是を六齋念佛と称す又鐘鼓を

用る所以は取勝王經曰金光明鼓出妙音声普

至三千大千世界能滅三途極難^矣又云鐘は三界

の苦を脱し即菩提證すとなり六齋精進

功德經曰奉鐘得妙香音声奉鼓得好音色受

天樂^矣故是等の調声をして上有頂に徹

し下奈利に通し蜻飛蟬動の類に至る

迄ひとしく法味を受用せしめんと欲すればなり

大凡念佛の節目を分つ事の四十八種在る事

ハをのつからは四十八願を表するなり中にをみて

四遍白米と名つくる念佛有るは又是四住の煩

悩を治して實相の称名を顕す事を表す
 なるなり蓋是より先かくのことくの流類なきにしも
 20
 あらず天慶の比念佛の人まれなり空也斯時に
 出て孟を扣き鐘を鳴らして念佛をすゝむ
 且大治に良忍の融通念佛在り建治に一遍の
 踊躍念佛在り彼等と家かすゝむるところと源を
 同して流を異にす敢て類同する事なかれと
 云へり其後花園院の御宇弥陀之像一軀納
 21
 て官府にあり正和年中に歎焉として
 22
 音光を放つ朝廷叡感在て則常行院に附
 23
 す且其瑞應を感じ院号を改め光堂と名
 つく或時上人睡眠の裏に弥陀如来告曰汝か
 修する所の六齋念佛功德無量なりと云へとも一月
 のうち只六日に限て輸る日あり今より已後時
 をゑらハす日を隔てす常修常行すへし汝又
 24
 齡ひ久しからす急に走り急に作して頭燃
 を救ふかことくすへし上人夢覺て随喜の涙
 をなかし然りしより淨土常行六齋念仏を建立
 し日別の勤修策勵怠る事なし斯時に
 をみて公卿太夫より士農工商に至るまで雲の
 ことく群霞のことく集り此化に應ずる者其数を
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 しらす時に正和四年六月廿五日上人儼然
 として淨衣を着し香炉をとり跏趺して
 門人に語て云く家今將に命終らんとす無量
 の聖衆來迎して空に滿と告終て十念相續
 し息たえ給へりに爾來數世を歴て法室壽源
 是を傳へ源公又是を光譽宗心に授く烏兔
 順環すと云へとも法猶一器写瓶なり伏以六道周
 居にして重昏永夜なり生盲無目にして恵
 照いまた期せずひとゑに称名にあらずんは誰

かねく救はん當流の安心尤時機に應せり百世
 31
 万代是を勤めて癡する事なかれ若然は後は
 清淨の域に生し現に無比の樂を受天下和
 順し日月清明風雨時を以てし障侵
 32
 さす國豊に民安して兵戈用る事なく徳を
 崇め仁を興し務て礼讓を行ふ永く佛法の
 金湯となり久しく皇家の藩幹とならんと云ふ事
 然り仍而興起かくのごとし

皆天正十三年 稗沙門

林鐘廿五鳥 謹誌

右之一卷者光福寺住持

依望雖惡筆遂書功畢

小野牛皮曼荼羅寺

天和二 戊辰載二月七日

隋心院門跡大僧正俊海(花押) 三十歳

註

- 1 果なし(山中 2021)。
- 2 來世(山中 2021)。
- 3 興起(山中 2021)。
- 4 就に(山中 2021)。
- 5 孫弟子(山中 2021)。
- 6 寓居するに(山中 2021)。
- 7 にて(山中 2021)。
- 8 高士(山中 2021)。
- 9 たかやす(山中 2021)。
- 10 淨し(山中 2021)。

- 11 喧し(山中 2021)。
- 12 得へきよし(山中 2021)。
- 13 しか(山中 2021)。
- 14 監せ(山中 2021)。
- 15 苦悪(山中 2021)。
- 16 みづから(山中 2021)。
- 17 唱ふ(山中 2021)。
- 18 云へし(山中 2021)。
- 19 受容(山中 2021)。
- 20 表すはかり(山中 2021)。
- 21 赫焉(山中 2021)。
- 22 有て(山中 2021)。
- 23 日を満つに(山中 2021)。
- 24 然し(山中 2021)。
- 25 應するも(山中 2021)。
- 26 其枝(山中 2021)。
- 27 二十五(山中 2021)。
- 28 をして(山中 2021)。
- 29 告げて(山中 2021)。
- 30 六周居(山中 2021)。
- 31 然時機(山中 2021)。
- 32 努て(山中 2021)。

〔付記一〕

本稿の成果は、京都精華大学人文学部・国際文化学部スチューデントコモンズCasaの活動の一環として光福寺を訪問した後、有志学生と寺院調査(聞き取り・撮影)をした成果の一部である。

〔付記二〕

卷子本の撮影や聞き取り調査では、光福寺様に多大なご協力をいただきました。改めて

深く御礼申し上げます。